は手名槌神（てなつちのかみ）で、八郎太郎との関係の伝説を持ち、対岸の天瀬川（三倉鼻）の男神（夫殿）と一対になった説話を持っています。明治以後、字大谷地と字追泊に分祀されました。

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

おそ【夜叉袋獺沢】

川獺といつても獣の名である。地名に獺の付くところは秋田県に二カ所あり、一カ所は八郎潟町夜叉袋に獺沢があり、もう一カ所は能代市檜山追分、旧羽州街道に現在も立ち並んでいる松並木(県指定史跡)より国道7号線寄りに獺野地名がある。その地名によって、かつては獺が生息したであろうと推測される。

1996年八郎潟広報ふるさと散歩、地名と歴史(2)

畠山四郎著

おちこべ【夜叉袋落首】

落首

「落首之地」の石碑があり、その背面に「南北朝戦争の砌、公は同志と共に南朝に組し、秋に利非ず死す。正長元年6月同志14名と共に此の地において刺首さる。」秋田県南秋田郡五城目町大川住人、藤原勝彦、後八十八代 渡辺米蔵、とある。

1999年　作者調査

落首堂

(南秋田郡八郎潟町)阿倍野比羅夫が秋田、能代の地を征討した時のことであった。八幡台の砦に豪勇無双の者がいた。彼は体躯衆に秀で、特に顔の長さが三尺(約90cm)もあったという。彼は、自己の豪勇にまかせて、官軍に激しく抗戦したが、戦いに敗れついに捕らえられ、首を切られた。しかし、さすがに、切られた首が落ちることなく、そのまましばらく逃げ延びたが、川原崎というところまで来て、とうとう首が地上に落ちて死んだということである。

村人は、官軍に抗した者とはいえ、その豪勇ぶりを誉め、その供養のために小さな祠を建てて「落ち首堂」として祀ったという。今でもそこに碑が建っている。

1976年　木崎和廣　羽後の伝説

****

カ　行

****

かいぼ【川崎貝保】【五城目町上小池開防】

かいぼ

八郎潟町史に「室町時代、武士達の家臣の大部分が所有地の屋敷に住んで、屋敷内の下人や在家農民が耕作していた。これらをお屋敷、土居(土塀のこと)、垣土(垣保)、垣土居と呼んでいた。」とある。この「垣保」は発音が貝保と同じである。本来は垣保と云ったのかも知れない。

作者の憶測

かいぼ

五城目町上小池にも「開防」と書いて「かいぼう」と読む地名があり、ここの「貝保」に隣接する地名だ。漢字は異なるが語源は一緒かもしれない。10世紀頃はこの辺は率浦郷に属し、八郎湖のできる前は海だったと言われる場所にあたる。陸地となってから、馬場目川の流域だったこともある。その時代、ここは洪水の頻繁にあった場所である。今の地名と関連がありそうな気もする。いずれにしても推測の域を出ない。

作者の憶測

かいぼ

「ボ」は「ホ」の濁音で元来は「ホ」と読む。保は五戸で一組とした隣組(江戸時代の五人組)、転じて地方の区称となり、さらに開墾した私有田地を意味するようになった。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名